

源氏物語

蓬生

紫式部

青空文庫

道もなき蓬よもぎをわけて君ぞこし誰たれにもま
 さる身のこころする
 （晶子）

源氏が須磨すま、明石あかしに漂泊さすらつていたころは、京のほうにも悲しく思い暮らす人の多数にあつた中でも、しかとした立場を持つてゐる人は、苦しい一面はあつても、たとえば二条の夫人などは、源氏が旅での生活の様子もかなりくわしく通信されてゐたし、便宜が多くて手紙を書いて出すこともよくできたし、当時無官になつてゐた源氏の無紋の衣いしやう裳もも季節に従つて仕立てて送るような慰みもあつた。真実悲しい境遇に落ちた人というのは、源氏が京を出発した際のことにもよるに想像するだけであつた女性たち、無視して行かれた恋人たちがそれであつた。常陸ひたちの宮の末摘すえつむはな花は、父君がおかれになつてから、だれも保護する人のない心細い境遇であつたのを、思いがけず生じた源氏との関係から、それ以来物質的に補助されることになつて、源氏の富からいへば物の数でもない情けをかけていたにすぎないのであつたが、受けるほうの貧しい女王によおう一家のためには、盪たらい星が映つてきたほどの望外の幸福になつて、生活苦から救われて幾年かを來たのであるが、あの事變後の

源氏は、いつさい世の中がいやになって、恋愛というほどのものでもなかった女性との関係は心から消しもし、消えもしたふうで、遠くへ立ってからははるばると手紙を送るようなこともしなかった。まだ源氏から恵まれた物があつてしばらくは泣く泣くも前の生活を続けることができたのであるが、次の年になり、また次の年になりするうちにはまったく底なしの貧しい身の上になってしまった。古くからいた女房たちなどは、

「ほんとうに運の悪い方ですよ。思いがけなく神か仏の出現なすったような親切をお見せになる方ができて、人というものはどこに幸運があるかわからないなどと、私たちはありますが、^{なげ}と歎くのであつた。昔は長い貧しい生活に慣れてしまつて、だれにもあきらめができていたのであるが、中で一度源氏の保護が加わつて、世間並みの暮らしができたことによつて、今の苦痛はいつそう^{はげ}烈しいものに感ぜられた。よかつた時代に昔から縁故のある女房をはじめてここに皆居つくことにもなつて、数が多くなつていたのも、またちりぢりにほかへ行つてしまった。そしてまた老衰して死ぬ女もあつて、月日とともに上から下まで召使の数が少なくなつていく。もとから荒廃していた邸^{やしき}はいつそう^{きつね}狐の巢のようになった。

気味悪く大きくなつた木立ちになく梟ふくろうの声を毎日邸の人は聞いていた。人が多ければそうしたものは影も見せない木精こだまなどという怪しいものも次第に形を顕あらわしてきたりする不快なことが数しらずあるのである。まだ少しばかり残っている女房は、

「これではしようがございません。近ごろは地方官などがよい邸を自慢に造りますが、こちらのお庭の木などに目をつけて、お売りになりませんかなどと近所の者から言わせてまいります、そうあそばして、こんな怖おそしい所はお捨てになつてほかへお移りなさいましょ。いつまでも残っております私たちだつてたまりませんから」

などと女主人に勧めるのであったが、

「そんなことをしてはたいへんよ。世間体もあります。私が生きている間は邸を人手に渡すなどということはできるものでない。こんなに恐こわい気がするほど荒れていても、お父様の魂が残っていると思う点で、私はあちこちをながめても心が慰むのだからね」

女王は泣きながらこう言つて、女房たちの進言を思いも寄らぬことにしていた。手道具なども昔の品の使い慣らしたりつばな物のあるのを、生物なま識りの骨董こつとう好きの人が、だれに製作させた物、某の傑作があると聞いて、譲り受けたいと、想像のできる貧乏さを軽けい蔑べして申し込んでくるのを、例のように女房たちは、

「しかたのないことでございますよ。困れば道具をお手放しになるのは」

と言つて、それを金にかえて目前の窮迫から救われようとする時があると、末摘花は頑^が強^{んきよう}にそれを拒む。

「私が見るようになと思つて作らせておいてくだすつたに違ひないのだから、それをつまらない家の装飾品になどさせてよいわけはない。お父様のお心持ちを無視することになるからね、お父様がおかわいそうだ」

ただ少しの助力でもしようとする人をも持たない女王であつた。兄の禪師^{ぜんじ}だけは稀^{まれ}に山から京へ出た時に訪ね^{たず}て来るが、その人も昔風な人で、同じ僧といつても生活する能力が全然ない、脱俗したとほめて言え言えるような男であつたから、庭の雑草を払わせればきれいになるものとも気がつかない。浅茅^{あさじ}は庭の表も見えぬほど茂つて、蓬^{よもぎ}は軒の高さに達するほど、葎^{むぐら}は西門、東門を閉じてしまったという用心がよくなったようにも聞こえるが、くずれた土塀^{どべい}は牛や馬が踏みならしてしまい、春夏には無礼な牧童が放牧をしに来た。八月に野分^{のわき}の風が強かつた年以来廊などは倒れたままになり、下屋の板葺^{いたぶき}きの建物のほうはわずかに骨が残っているだけ、下男などのそこにとどまっている者はない。廚^{くりや}の煙が立たないでなお生きた人が住んでいるという悲しい邸^{やしき}である。盗人といううながむし

やらな連中も外見の貧弱さに愛想あいそをつかせて、ここだけは素通りにしてやって来なかったから、こんな野良藪のちやぶのような邸の中で、寢殿しんでんだけは普通の飾りつけがしてあった。しかしきれいに掃除そうじをしようとするような心がけの人もない。埃ちりは積もつてもあるべき物の数だけはそろった座敷に末摘花すえつむはなは暮らしていた。古い歌集を読んだり、小説を見たりすることのでつれづれが慰められることにもなるし、物質的に不足の多い境遇も忍んで行けるのであるが、末摘花はそんな趣味も持っていない。それは必ずしもよいことではないが、暇な女性の間で友情を盛った手紙を書きかわすことなどは、多感な年ごろではそれによって自然の見方も深くなつていき、木や草にも慰められることにもなるが、この女王は父宮が大事にお扱いになつた時と同じ心持ちでいて、普通の人との交際はいつさい避けて友人を持つていないのである。親戚関係があつても親しもうとせず、好意を寄せようとしなない態度は手紙を書かぬ所にうかがわれもするのである。古くさい書物棚だなから、唐守からもり、藐姑はこ射やとじの刀自かぐやひめ、赫耶姫物語などを絵に描いた物を引き出して退屈しのぎにしていた。古歌などもよい作を選よつて、端書きも作者の名も書き抜いて置いて見るのがおもしろいのであるが、この人は古紙屋紙ふるかんやがみとか、檀紙だんしとかの湿り気を含んで厚くなつた物などへ、だれもの知っている新味などは微塵みじんもないようなものの書き抜いてしまつてあるのを、物思いのつ

のつた時などには出してひろ拵ひろげていた。今の婦人がだれもするように経を読んだり仏勤めをしたりすることは生意氣だと思ふのかだれも見人はないのであるが、数珠じゆずを持つようなことは絶対にない。こんなふうには末摘花は古典的であつた。

侍従という乳母めのとの娘などは、主家を離れないで残っている女房の一人であつたが、以前から半分ずつは勤めに出ていた齋院がお亡かくれになつてからは、侍従もしかたなしに女にょお王うの母君の妹で、その人だけが身分違いの地方官の妻になつている人があつて、娘をか
しずいて、若いよい女房を幾人でもほしがる家へ、そこは死んだ母もおりふし行つていた
所であるからと思つて、時々そこへ行つて勤めていた。末摘花は人に親しめない性格であ
つたから、叔母おばともあまり交際をしなかつた。

「お姉様は私を軽蔑けいべつなすつて、私のいることを不名誉にしていらつしやつたから、姫君
が気の毒な一人ぼっちでも私は世話をしてあげないのだよ」

などという悪態口も侍従に聞かせながら、時々侍従に手紙を持たせてよこした。初めか
ら地方官級の家に生まれた人は、貴族をまねて、思想的にも思ひ上がった人になつてい
る者も多いのに、この夫人は貴族の出でありながら、下の階級へはいつて行く運命を生まれ
ながらに持つていたものか、卑しい性格の叔母君であつた。自身が、家門の顔汚しのよう

に思われていた昔の腹いせに、常陸^{ひたち}の宮の女王を自身の娘たちの女房にしてやりたい、昔風なところはあるが氣だてのよい後見役ができるであろうとこんなことを思つて、

時々私の宅へもおいでくださつたらいかがですか。あなたのお琴の音^ねも伺いたがる娘たちもおります。

と言つて来た。これを実現させようと叔母は侍従にも促すのであるが、末摘花は負けじ魂からではなく、ただ恥ずかしくきまりが悪いために、叔母の招待に応じようとしないうを、叔母のほうではなくやしく思つていた。そのうちに叔母の良人^{おつと}が九州の大貳^{だいに}に任命された。娘たちをそれぞれ結婚させておいて、夫婦で任地へ立とうとする時にもまだ叔母は女王を伴つて行きたがつて、

「遠方へ行くことになりましたと、あなたが心細い暮らしをしておいでになるのを捨てておくことが氣になつてなりません。ただ今までもお構いはしませんでした、近い所にいるうちはいつでもお力になれる自信がありましたので」

と体裁よく言^{こと}つて誘いかけるのも、女王が聞き入れないから、

「まあ憎らしい。いばつていらつしやる。自分だけはえらいつもりでも、あの藪^{やぶ}の中の人を大将さんだつて奥様らしくは扱つてくださらないだろう」

と言つてののしつた。そのうちに源氏宥免ゆうめんの宣旨が下り、帰京の段になると、忠実に待つていた志操の堅さをだれよりも先に認められようとする男女に、それぞれ有形無形の代償を喜んで源氏の払つた時期にも、末摘花だけは思い出されることもなくて幾月かがそのうちたつた。もう何の望みもかけられない。長い間不幸な境遇に落ちていた源氏のために、その勢力が宮廷に復活する日があるようにと念じ暮らしたものであるのに、賤しい階級の人でさえも源氏の再び得た輝かしい地位を喜んでゐる時にも、ただよそのこととして聞いていねばならぬ自分でなければならなかつたか、源氏が京から追われた時には自分一人の不幸のように悲しんだが、この世はこんな不公平なものであるのかと思つて末摘花は恨めしく苦しく切なく一人で泣いてばかりいた。

大弐の夫人は、私の言つたとおりじゃないか。どうしてあんな見る影もない人を源氏の君が奥様の一人だと思ひになるものかね、仏様だつて罪の軽い者ほどよく導いてくださるのだ。手もつけられないほどの貧乏女でいて、いばつていて、宮様や奥さんのいらつしやつた時と同じように思い上がつてゐるのだから始末が悪いなどと思つていつそう軽蔑けいべつ的に末摘花を見た。

「ぜひ決心をして九州へおいでなさい。世の中が悲しくなる時には、人は進んでも旅へ出

るではありませんか。田舎^{いなか}とはいやな所のようにお思いになるかしりませんが、私は受け合つてあなたを楽しくさせます」

口前よく熱心に同行を促すと、貧乏に飽いた女房などは、

「そうなければいいのに、何のたのむ所もない方が、どうしてまた意地をお張りになるのだろう」

と言つて、末摘花を批難した。侍従も大貳の甥^{おい}のような男の愛人になつていて、京へ残ることもできない立場から、その意志でもなく女王のもとを去つて九州行きをすることになつていた。

「京へお置きして参ることは気がかりでありませんからいらつしやいませ」

と誘うのであるが、女王の心はなお忘れられた形になつてゐる源氏を頼みにしていた。

どんなに時がたつても自分の思い出される機会のないわけではない、あれほど堅い誓いを自分にくれた人の心は変わつていないはずであるが、自分の運の悪いために捨てられたとも人からは見られるようなことになつてゐるのであらう、風の便り^{たよ}でも自分の哀れな生活が源氏の耳にはいれればきつと救つてくれるに違いないと、これはずっと以前から女王の信じているところであつて、邸^{やしき}も家も昔に倍した荒廃のしかたではあるが、部屋の中の

道具類をそこばくの金に変えていくようなことは、源氏の来た時に不都合であるからと忍耐を続けているのである。気をめいらせて泣いている時のほうが多い末摘花の顔は、一つの木の実だけを大事に顔に当てて持っている仙人^{せんじん}人とも言つてよい奇怪な物に見えて、異性の興味を惹く^ひ価値などはない。気の毒であるからくわしい描写はしないことにする。

冬にはいればはいるほど頼りなさは一ひどくなって、悲しく物思ひばかりして暮らす女王だった。源氏のほうでは故院のための盛んな八講を催して、世間がそれに湧^わき立っていた。僧などは平凡な者を呼ばずに学問と徳行のすぐれたのを選んで招じたその物事に、女王の兄の禅師も出た歸りに妹君を訪^{たず}ねて来た。

「源大納言さんの八講に行つたのです。たいへんな準備でね、この世の浄土のように法要の場所はできていましたよ。音楽も舞樂もたいしたものでしたよ。あの方はきつと仏様の化身^{けしん}だろう、五濁^{ごじよく}の世にどうして生まれておいでになつたらう」

こんな話をして禅師はすぐに歸つた。普通の兄弟^{きょうだい}のように話し合わない二人であるから、生活苦も末摘花^{すえつむはな}は訴えることができないのである。それにしてもこの不幸なみじめな女を捨てて置くというのは、情けない仏様であると末摘花は恨めしかった。こんな気のした時から、自分はもう顧みられる望みがないのだらうとようやく思うようになった。

そんなころであるが大貳の夫人が突然訪ねて来た。平生はそれほど親密にはしていないのであるが、つれて行きたい心から、作った女王の衣裳いしやうなども持って、よい車に乗って来た得意な顔の夫人がにわかに常陸の宮邸へ現われたのである。門をあけさせている時から目にはいつてくるものは荒廃そのもののような寂しい庭であつた。門の扉も安定がなくなつていて倒れたのを、供の者が立て直したりする騒ぎである。この草の中にもどこかに三つだけの道はついているはずであると皆が捜した。そしてやつと建物の南向きの縁の所へ車を着けた。

きまりの悪い迷惑なことと思ひながら女王は侍従を応接に出した。煤すすけた几帳きちやうを押し出しながら侍従は客と対したのである。容貌ようぼうは以前に比べてよほど衰えていた。しかしやつれながらもきれいで、女王の顔に代えたい気がする。

「もう出発しなければならぬのですが、こちらのことが気がかりなものですから、今日は侍従の迎えがてらお訪ねたずしました。私の好意をくんでくださらないで、御自分がちよつとでも来てくださることを御承知にならないことはやむをえませんが、せめて侍従だけをよこしていただくお許しをいただきに來たのです。まあお氣の毒なふうで暮らしていらつしやるのですね」

こう言ったのであるから、続いて泣いてみせねばならないのであるが、実は大式夫人は九州の長官夫人になって出発して行く希望に燃えているのである。

「宮様がおいでになったころ、私の結婚相手が悪いからって、交際するのをおきらいになったものですから、私もつかいかけ離れた冷淡なふうになっていましたもの、それからこちら様は源氏の大将さんなどと御結婚をなさるような御幸運でいらっしゃいましたから、晴れがましくてお出入りもしにくかったです。しかし人間世界は幸福なことばかりありませんからね、その中でわれわれ階級の者がかえって気楽なんですよ。及びもない懸隔のあるお家うちでしたが、こちらはお気の毒なことになってしまいました、私も心配なんです、近くにおりますうちは、何かの場合に力にもなれると思っていましたもの、遠い所へ出て行くことになりますと、とてもあなたのことが気になってなりません」

と夫人は言うのであるが、女王は心の動いたふうもなかった。

「御好意はうれしいのですが、人並みの人にもなれない私はこのままここで死んで行くのが何よりもよく似合うことだろうと思います」

とだけ末摘花は言う。

「それはそうお思になるのはごもつともですが、生きている人間であって、こんなひど

い場所に住んでいるのなどはほかにめつたにないでしょう。大将さんが修繕をしてくだす
 たら、またもう一度玉の台うてなにもなるでしょうと期待されますがね。近ごろはどうしたこ
 とでしょう、兵部卿ひょうぶきやうの宮の姫君のほかはだれも嫌きらいになっておしまいになったふうで
 すね。昔から恋愛関係をたくさん持つていらつしやった方でしたが、それも皆清算してお
 しまいになりましたってね。ましてこんなみじめな生き方をしていらつしやる人を、操みさおを
 立てて自分を待つていてくれたかと受け入れてくださることはむずかしいでしょうね」

こんなよいなことまで言われてみると、そうであるかもしれないと末摘花は悲しく泣
 き入ってしまった。しかも九州行きを肯うべなうふうは微塵みじんもない。夫人はいろいろと誘惑を試
 みたあとで、

「では侍従だけでも」

と日の暮れていくのを見てせきたてた。侍従は名残なごりを惜しむ間もなく、泣く泣く女にようお
 王うに、

「それでは、今日はあんなにおつしやいますから、お送りにだけついてまいります。あち
 らがああおつしやるのもつともですし、あなた様が行きたく思おぼしめ召さないのも御無理だ
 とは思われませんし、私は中に立つてつらくてなりませんから」

と言う。この人までも女王を捨てて行こうとするのを、恨めしくも悲しくも末摘花は思ふのであるが、引き止めようもなくてただ泣くばかりであった。形見に与えたい衣服も皆悪くなつていて長い間のこの人の好意に酬^{むく}いる物がなくて、末摘花は自身の抜け毛を集めて鬢^{かざり}にした九尺ぐらいの髪の毛の美しいのを、雅味のある箱に入れて、昔のよい薫^{くんこう}香一壺^{つぼ}をそれにつけて侍従へ贈った。

「絶ゆまじきすぢを頼みし玉かづら思ひのほかにかき離れぬる

死んだ乳母^{また}が遺言したこともあるからね、つまらない私だけれど一生あなたの世話をしたいと思つていた。あなたが捨ててしまうのももともただけれど、だれがあなたの代わりになつて私を慰めてくれる者があると思つて立つて行くのだろうと思つて恨めしいのよ」と言つて、女王は非常に泣いた。侍従も涙でものが言えないほどになつていた。

「乳母^{また}が申し上げましたことはむろんでございますが、そのほかにもごいっしょに長い間苦勞をしてまいりましたのに、思いがけない縁に引かれて、しかも遠方へまで行つてしまいますとは」

と言つて、また、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道のたむけの神もかけて誓はん

命のございます間はあなた様に誠意をお見せします」

などとも言う。

「侍従はどうしました。暗くなりましたよ」

と大式夫人に小言こごごを言われて、侍従は夢中で車に乗ってしまった。そしてあとばかりが顧みられた。困りながらも長い間離れて行かなかつた人が、こんなふうにして別れて行つたことで、女王はますます心細くなつた。だれも雇い手のないような老いた女房までが、「もつともですよ。どうしてこのままいられるのですか。私たちだつてもう我慢ができませんよ」

こんなことを言つて、ほかへ勤める手蔓てづるを捜し始めて、ここを出る決心をしたらしいことを言い合うのを聞くことも末摘花の身にはつらいことであつた。十一月になると雪や霰みぞれの日が多くなつて、ほかの所では消えている間があつても、ここでは丈の高い枯れた雑草

の蔭^{かげ}などに深く積もつたものは量^{かさ}が高くなるばかりで越^{こし}の白山^{はくさん}をそこに置いた気がする庭を、今はもうだれ一人出入りする下男もなかった。こんな中につれづれな日を送るよりしかたのない末摘花の女王であつた。泣き合い笑い合うこともあつた侍従がいなくなつてからは、夜の塵^{ちり}のかかつた帳台の中でただ一人寂しい思いをして寝た。

源氏は長くこがれ続けた紫夫人のもとへ帰りえた満足感が大きくて、ただの恋人たちの所などへは足が向かない時期でもあつたから、常陸^{ひたち}の宮の女王はまだ生きているだろうかというほどのことは時々心に上らないことはなかつたが、捜し出してやりたいと思うことも、急ぐことと思われないでいるうちにその年も暮れた。四月ごろに花散里^{はなちるさと}を訪ねて見たくなつて夫人の了解を得てから源氏は二条の院を出た。幾日か続いた雨の残り雨らしいものが降つてやんだあとで月が出てきた。青春時代の忍び歩きの思い出される艶^{えん}な夕月夜であつた。車の中の源氏は昔をうつらうつらと幻に見ていると、形もないほどに荒れた大木が森のような邸^{やしき}の前に来た。高い松に藤^{ふじ}がかかつて月の光に花のなびくのが見え、風といつしよにその香がなつかしく送られてくる。橘^{たちばな}とはまた違つた感じのする花の香に心が惹^ひかれて、車から少し顔を出すようにしてながめると、長く枝をたれた柳も、土塀^{どべい}のない自由さに乱れ合つていた。見たことのある木立ちであると源氏は思ったが、以前の常陸の

宮であることに気がついた。源氏は物哀れな気持ちになつて車を止めさせた。例の惟光
はこんな微行にはずれたことのない男で、ついて来ていた。

「ここは常陸の宮だったね」

「さようでございます」

「ここにいた人がまだ住んでいるかもしれない。私は訪ねてやらねばならないのだが、わざわざ出かけることもたいそうになるから、この機会に、もしその人がいれば逢つてみよう。はいつて行つて尋ねて来てくれ。住み主がだれであるかを聞いてから私のことを言わないと恥をかくよ」

と源氏は言つた。

末摘花の君は物惱ましい初夏の日に、その昼間うたた寝をした時の夢に父宮を見て、さめてからも名残なごりの思いにとらわれて、悲しみながら雨の洩もつて濡れたぬ廂ひさしの室の端のほうを拭ふかせたり部屋の中を片づけさせたりなどして、平生にも似ず歌を思つてみたのである。

亡なき人を恋たもとふる袂たもとのほどなきに荒れたる軒しづくの雫しづくさへ添ふ

こんなふうには、寂しさを書いていた時が、源氏の車の止められた時であった。

惟光は邸の中へはいってあちらこちらと歩いて見て、人のいる物音の聞こえる所があるかと捜したのであるが、そんな物はない。自分の想像どおりにだれもない、自分は往き返りにこの邸やしきは見るが、人の住んでいる所とは思われなかったのだからと思つて惟光が足を返そうとする時に、月が明るくさし出したので、もう一度見ると、格子こうしを二間ほど上げて、その御簾みすは人ありげに動いていた。これが目にはいった刹那せつなは恐ろしい気さえたが、寄つて行つて声をかけると、老人らしく咳せきを先に立てて答える女があつた。

「いらつしやつたのはどなたですか」

惟光これみつは自分の名を告げてから、

「侍従さんという方にちよつとお目にかかりたいのですが」

と言つた。

「その人はよそへ行きました。けれども侍従の仲間の者がおります」

と言う声は、昔よりもずっと老人じみてきてはいるが、聞き覚えのある声であつた。家の中の人は惟光が何であつたかを忘れていた。狩衣かりぎぬ姿の男がそつとはいって来て、柔らかな調子でものを言うのであつたから、あるいは狐きつねか何かではないかと思つたが、惟光が

近づいて行つて、

「確かなことをお聞かせくださいませんか。こちら様が昔のままでおいでになるかどうかお聞かせください。私の主人のほうでは変心も何もしておいでにならない御様子です。今晚も門をお通りになつて、訪ねてみたと思召すふうで車を止めておいでになります。どうお返辞をすればいいでしょう、ありのままのお話を私には御遠慮なくして下さい」

と言うと、女たちは笑い出した。

「變わつていらつしやればこんなお邸にそのまま住んでおいでになるはずありません。御推察なさいましてあなたからよろしくお返辞を申し上げてください。私どものような老人でさえ経験したことのないような苦しみをなめて今日までお待ちになつたのでございませよ」

女たちは惟光にもつともつと話したいというふうであつたが、惟光は迷惑に思つて、
「いやわかりました。ともかくそう申し上げます」

と言ひ残して出て来た。

「なぜ長くかかったの、どうだったかね、昔の路を見いだせない蓬原よもぎがはらになつてゐるね」
源氏に問われて惟光は初めからの報告をするのであつた。

「そんなふうにして、やっと人間を発見したのでございます。侍従の叔母おばで少将とか申しました老人が昔の声で話しました」

惟光はなお目に見た邸内の様子をくわしく言う。源氏は非常に哀れに思った。この廃邸じみた家に、どんな気持ちで住んでいることであろう、それを自分は今まで捨てていたと思うと、源氏は自分ながらも冷酷であつたと省みられるのであつた。

「どうしようかね、こんなふうに出かけて来ることも近ごろは容易でないのだから、この機会でなくては訪ねられないだろう。すべてのことを綜そうごう合して考えてみても昔のままに独身でいる想像のつく人だ」

と源氏は言いながらも、この邸へはいって行くことにはなお躊躇ちゆうちゆうがされた。この実感からよい歌を詠よんでまず贈りたい気のある場合であるが、機敏に返歌のできないことも昔のままであつたなら、待たされる使いがどんなに迷惑をするかしれないと思つてそれはやめることにした。惟光も源氏がすぐにはいつて行くことは不可能だと思つた。

「とても中をお歩きになれないほどの露でございます。よもぎ蓬を少し払わせましてからおいでになりましたら」

この惟光これみつの言葉を聞いて、源氏は、

尋ねてもわれこそ訪はめ道もなく深き蓬のものと心を

と口ずさんだが、やはり車からすぐに下りてしまった。惟光は草の露を馬の鞭で払いながら案内した。木の枝から散る雫も秋の時雨のように荒く降るので、傘を源氏にさしかけさせた。惟光が、

「木の下露は雨にまされり（みさぶらひ御笠と申せ宮城野の）でございます」

と言う。源氏の指貫の裾はひどく濡れた。昔でさえあるかないかであった中門などは影もなくなっている。家の中へはいるのもむき出しな氣のすることであつたが、だれも人は見ていなかった。

女王は望みをかけて来たことの事實になつたことはうれしかったが、りっぱな姿の源氏に見られる自分を恥ずかしく思った。大弐の夫人の贈つた衣服はそれまで、いやな氣がしてよく見ようとしなかつたのを、女房らが香を入れる唐櫃にしまつて置いたからよい香のついたのに、その人々からしかたなしに着かえさせられて、煤けた几帳を引き寄せてすわっていた。源氏は座に着いてから言つた。

「長くお逢いしないでも、私の心だけは変わらずにあなたを思っていたのですが、何ともあなたが言ってくださらないものだから、恨めしくて、今までためすつもりで冷淡を装っていたのですよ。しかし、三輪みわの杉すぎではないが、この前の木立ちを目に見ると素通りができなくてね、私から負けて出ることにしましたよ」

几帳きちようの垂れ絹たを少し手であけて見ると、女王は例のようにただ恥はづかしそうにすわっていて、すぐに返辞はようしない。こんな住居すまいにまで訪ねて来た源氏の志の身にしむことによつてやつと力づいて何かを少し言つた。

「こんな草原の中で、ほかの望みも起こさずに待つていくのだから私は幸福を感じる。またあなただつて、あなたの近ごろの心持ちもよく聞かないままで、自分の愛から推して、愛を持つていてくださると信じて訪ねて来た私を何と 생각합니다。今日まであなたに苦勞をさせておいたことも、私の心からのことでなくて、その時は世の中の事情が悪かつたのだと思つて許してくださいでしょう。今後の私が誠実の欠けたようなことをすれば、その時は私が十分に責任を負いますよ」

などと、それほどに思わぬことも、女を感動さすべく源氏は言つた。泊まって行くこともこの家の様子と自身とが調和の取れないことを思つて、もつともらしく口実を作つて源

氏は帰ろうとした。自身の植えた松ではないが、昔に比べて高くなった木を見ても、年月の長い隔たりが源氏に思われた。そして源氏の自身の今日の身の上と逆境にいたころが思い比べられもした。

「藤波^{ふじなみ}の打ち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ

数えてみればずいぶん長い月日になることでしょうね。物哀れになりますよ。またゆり可悲しい旅人だった時代の話も聞かせに来ましょう。あなたもどんなに苦しかったかという辛苦の跡も、私でなくては聞かせる人がないでしょう。とまちがいかもしれぬが私は信じているのですよ」

などと源氏が言うのと、

年を経て待つしるしなきわが宿は花のたよりに過ぎぬばかりか

と低い声で女王は言った。身じろぎに知れる姿も、袖^{そで}に含んだにおいも昔よりは感じよ

くなつた気がすると源氏は思った。落ちようとする月の光が西の妻戸の開いた口からさし
てきて、その向こうにあるはずの廊もなくなっていたし、^{ひさし}廂の板もすっかり取れた家であ
るから、明るく室内が見渡された。昔のままに飾りつけのそろっていることは、忍ぶ草の
おい茂つた外見よりも風流に見えるのであった。昔の小説に親の作つた堂を^{こぼ}毀つた話もあ
るが、これは親のしたままを長く保つていく人として心の^ひ惹かれるところがあると源氏は
思った。この人の^{しゅうち}羞恥心の多いところもさすがに貴女^{きじょ}であるとうなずかれて、この人を
一生風変わりな愛人と思おうとした考えも、いろいろなことに紛れて忘れてしまつていた
ころ、この人はどんなに恨めしく思つたであろうと哀れに思われた。ここを出てから源氏
の訪ねて行つた花散里も、美しい^{はで}派手な女というのではなかったから、末摘花の醜さも比
較して考えられることがなく済んだのであらうと思われる。

賀茂祭り、齋院の^{ごけい}御禊などのあるころは、その用意の品という名義で諸方から源氏へ送
つて来る物の多いのを、源氏はまたあちらこちらへ分配した。その中でも常陸の宮へ贈る
のは、源氏自身が何かと^{さしず}指図をして、宮邸に足らぬ物を何かと多く加えさせた。親しい家^け
司^{いし}に命じて下男などを宮家へやつて邸内の手入れをさせた。庭の^{よもぎ}蓬を刈らせ、応急に土塀^{どべい}
の代わりの板塀を作らせなどした。源氏が妻と認めての待遇をし出したと世間から見られ

るのは不名誉な気がして、自身で訪ねて行くことはなかった。手紙はこまごまと書いて送ることを怠らない。二条の院にすぐ近い地所へこのごろ建築させている家のことを、源氏は末摘花に告げて、

そこへあなたを迎えようと思う、今から童女として使うのによい子供を選んで馴ならしておきなさい。

ともその手紙には書いてあった。女房たちの着料までも気をつけて送って来る源氏に感謝して、それらの人々は源氏の二条の院のほうを向いて拝んでいた。一時的の恋にも平凡な女を相手にしなかった源氏で、ある特色の備わった女性には興味を持って熱心に愛する人として源氏をだれも知っているのであるが、何一つすぐれた所のない末摘花をなぜ妻の一人としてこんな取り扱いをするのであろう。これも前生の因縁ごとであるに違いない。もう暗い前途があるばかりのように見切りをつけて、女王の家を去った人々、それは上から下まで幾人もある旧召使が、われもわれもと再勤を願って来た。善良さは稀まれに見るほどの女性である末摘花のもとに使われて、気楽に暮らした女房たちが、ただの地方官の家などに雇われて、気まずいことの多いのにあきれて帰って来る者もある。見えすいたような追従も皆言ってくる。昔よりいつそう強い勢力を得ている源氏は、思いやりも深くなった

今の心から、扶たすけ起こそうとしている女王の家は、人影もにぎやかに見えてきて、繁しげりほ
うだいですごいものに見えた木や草も整理されて、流れに水の通るようになり、立ち木や
草の姿も優美に清い感じのするものになっていった。職ほを欲ほしがっている下家しもけいし司級しの人
は、源氏が一人の夫人の家として世話をやく様子を見て、仕えたいと申し込んで来て、宮
家に執事もできた。

末摘花は二年ほどこの家において、のちには東の院へ源氏に迎えられ、夫婦として同室に
暮らすようなことはめつたになかったのであるが、近い所であつたから、ほかの用で来た
時に話して行くようなことくらいはよくして、軽蔑けいべつした扱あいは少しもしなかったのだら
う。大貳の夫人が帰京した時に、どんな驚き方をしたか、侍従が女王の幸福を喜びながら
も、時が待ち切れずに姫君を捨てて行つた自身のあやまちをどんなに悔いたかというよう
なことも、もう少し述べておきたいのであるが、筆者は頭が痛くなってきたから、またほ
かの機会に思い出して書くことにする。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

蓬生

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>